注釈「魏志倭人伝」　女王国

倭人は帯方の東南の大海の中に在り。山島に依りて國邑を為す。舊百餘國。漢の時に朝見する者有り。今、使譯通ずるは三十國。
倭人は帯方の東南の大海の中に在り。山島に依拠して國や邑(むら)を形成している。旧は百余國。漢の時に朝見する者がいた。現在使者、通訳が行き来しているのは三十國である。

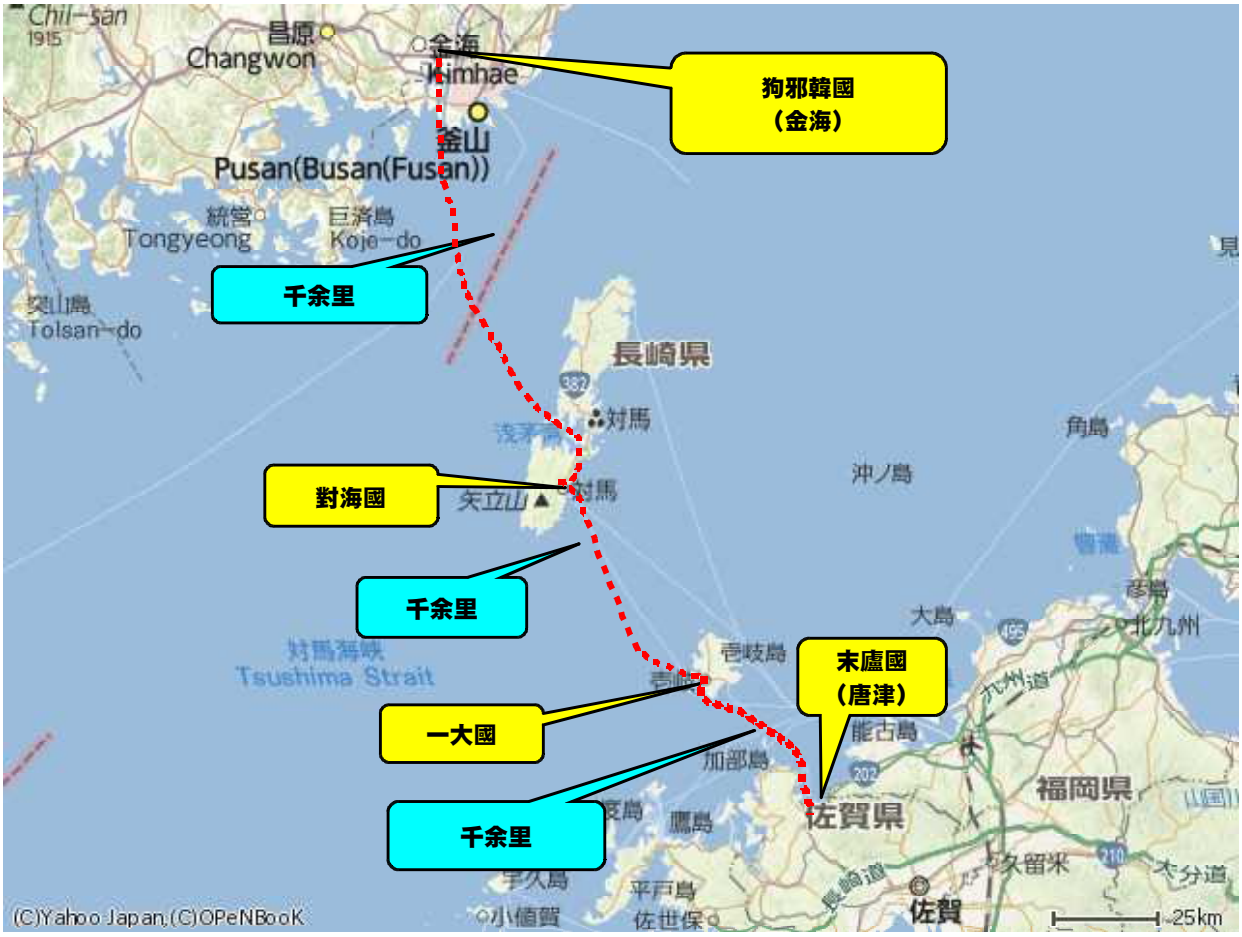
郡より倭に至る。海岸に循って水行す。韓國を歴る。乍は南、乍は東、その北岸、狗邪韓國に到る。七千餘里
帯方郡より倭國へ行くには、韓半島の西海岸に従って船で少し南下する。(韓国盾津)で上陸して、韓國内を或いは南に或いは東に進んで、倭の領地の北岸の国、狗邪韓国(金海)に到着する。七千餘里

始めて一海を渡る。千餘里。對海國に至る。その大官は卑狗と云う。副(官)は卑奴母離と云う。絶島に居す。方四百餘里ばかり。土地は山険しく深林多し。道路は禽鹿の徑の如し。千餘戸有り。良田なく、海物を食して自活す。船に乗りて南北に市糴す。
狗邪韓國から、まず、一海を渡る。千里余りで對海國(対馬市)に到着する。その官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。對海國(対馬市)は絶海の孤島にある。島は一辺四百里余りの方形である。山は険しく、森も深い。道路は野性の鹿が通う小道のようである。千戸余りの民家がある。良田は無く、海産物を食べて生活している。船に乗って南に北に交易する。

又南一海を渡る。千餘里。名は瀚海と云う。一大國に至る。官は亦卑狗と云う。副(官)は卑奴母離

と云う。方三百里ばかり。竹木、叢林多し。三千許の家有り。差田地有り。田を耕せど、なお食不足し、亦南北に市糴す。

對海國から再び南の方向に海を渡ると、千里余りで一大國（壱岐市）に至る。一大國の官は卑狗と云う。副官は卑奴母離と云う。一大國の形は一辺三百里余りの方形である。島には竹林や叢林が多く、三千戸ほどの家がある。この島は、對海國に較べれば田地があり耕作する。だが、やはり、食糧は不足するので對海國と同じように船で南や北に交易する。



又一海を渡る千餘里。末盧國に至る。四千餘戸有り。山、海に濱て居す。草木は茂盛し、行、前人を見ず。好んで魚鰒を捕らえる。水の深浅無く、皆、沈没してこれを取る。

一大國から再び海を渡ると、千里余りで末盧國（唐津市）に着く。末盧國（唐津市）には四千戸余りの人家がある。山や海に沿って暮らす。この地には草木が生い茂り、帯方郡の使節一行は前を進む人を見ることはない。この地の人々も海の水深にかかわらず、皆、よく、海に潜って魚やあわびを取っている。

（末盧國の）東南に陸行五百里伊都國に到る。官は爾支と云う。副は泄謨觚柄渠觚と云う。千餘戸有り。世（世々）王有り。皆女王國に統属す。郡使が往來し、常に駐まる。

末盧國から東南に陸路を進むと、五百里（50km）で伊都國（佐賀市）に着く。伊都國（佐賀市）の官は爾支と云う。副官は泄謨觚、柄渠觚と云う。千戸余りの民家がある。代々王がいる。王は皆女王國と血統が同じである。郡使が往来し、常に駐在するところである。

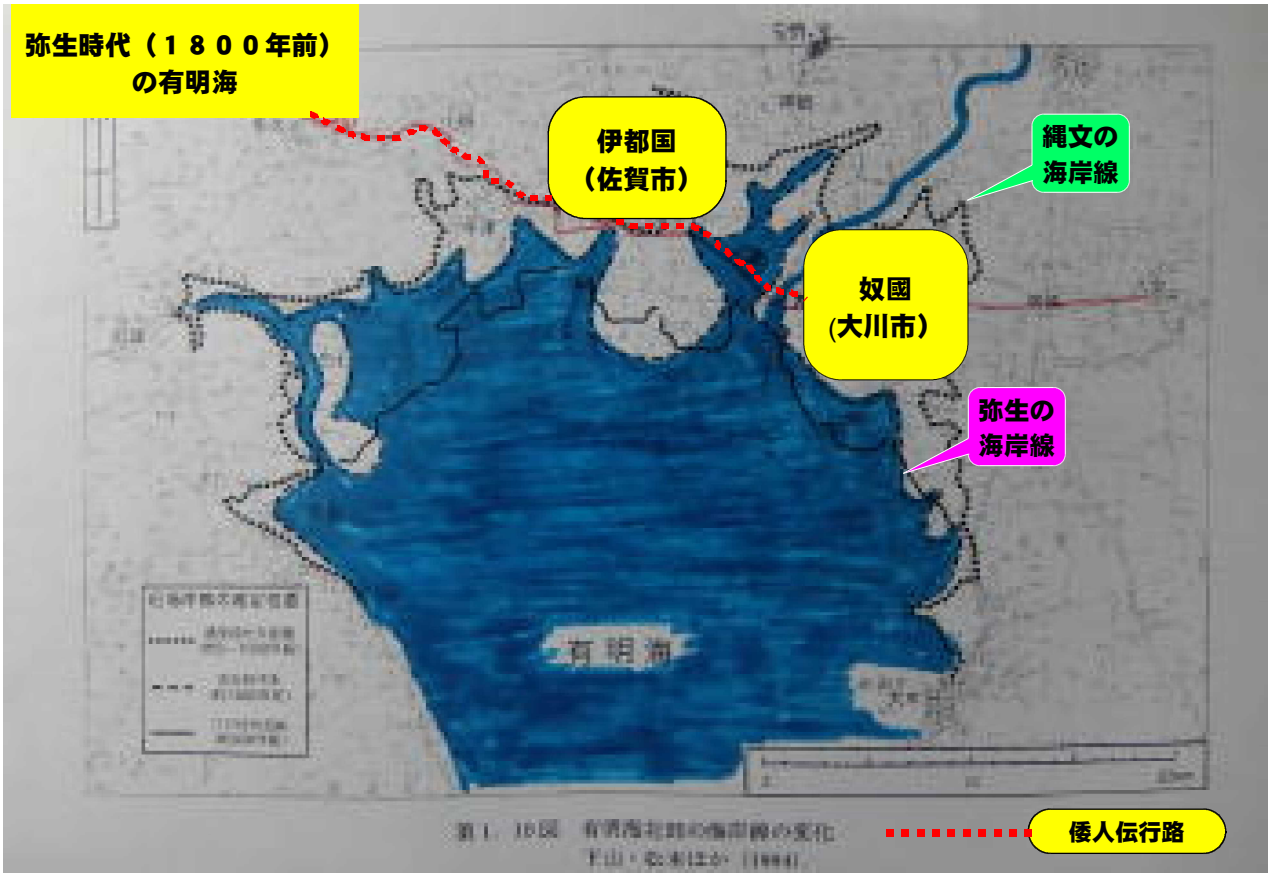
この単純で明快な漢文が日本國中で読み替えられている。この「東南」を「東北」に原文改訂して読んでいる。その誤謬が『魏志倭人伝』の理解を根本的に歪め、日本中の大混乱の元凶となっている。帯方郡使が方角をまちがえたなどは決して起こりえなかったことである。方角は絶対認識である。どこの國の人であろうと、いつの時代であろうと時間、場所に関わりなく東と云えば東である。東南と云えば東南である。いかなる理由を付けようとも、東南を東北に変更することは許されることではない。
『倭人伝』には帯方郡の太守弓遵の使者建中校尉、梯儁(ていしゅん)、また、太守王頎(おうき)の使者塞曹掾史張政(ちょうせい)等が倭國へ来たことが記されている。彼らは末盧國から伊都國に通じる東南路を歩んだのである。決して、東北の路ではない。この東南路は国道203号線である。
また、倭國からの使者も帯方郡、魏の都洛陽へ行っている。その使者の名前は難升米、牛利、伊聲耆、掖邪狗と正確に記録されている。倭國と帯方郡を結ぶこの道をお互いの使者が何百人と通ったのである。方角をまちがえて記録したわけはない。

糸島の「怡土郡」は唐津の東北である。したがって「怡土郡」は『魏志倭人伝』が書いた伊都國ではない。『魏志倭人伝』の伊都國は唐津の東南である。伊都國へは『魏志倭人伝』が記している絶対認識「東南」を一切曲げずに進まなければならない。そして、これからも『倭人伝』に記された方角を一切変えずに進まなければならない。
『倭人伝』の伊都國は、唐津から東南へ50kmほど行った所に存在した弥生国家である。
伊都國は佐賀市である。現代の計測では唐津市役所から佐賀市役所までの距離は、50.2kmである。佐賀市が『魏志倭人伝』伊都國である。

（伊都國の）東南、奴國に至る。百里。官は兒馬觚と云う。副は卑奴母離と云う。二萬餘戸有り。
伊都國（佐賀市）から東南に行くと奴國（大川市）に到着する。百里（10km）。奴國（大川市）の官は馬觚と云う。副官は卑奴母離と云う。二万戸余りの民家がある。

伊都國(佐賀市)を出て国道208号線を東南に進んで行くと筑後川にぶつかる。その地名は諸富津(もろどみつ)である。つい最近までここに筑後川の渡しがあった。そこで渡し船に乗ることにする。筑後川の中州、大中島へ渡る。再び舟に乗り、向島(むかいじま)へ渡る。向島は現在地続きであるが、古代は島だったであろう。また、舟に乗って筑後川の東岸大川市の若津に着く。大川市は佐賀市から東南にほぼ10kmである。大川市が奴國である。

ところが、この208号線は弥生時代は海の底だった。下山正一氏・松浦浩久氏・日野剛徳氏の研究報告がある。それによると、この時代、有明海はずっと北上していた。伊都國から奴国への道は海の道で、ここは船で渡ったのである。



＜地域地質研究報告＞
5万分の1の地質図幅、福岡(14)第71号 NI-52-11-9「佐賀地域の地質」
下山正一氏・松浦浩久氏・日野剛徳氏

(1)　大川市は現代とほとんど変わらない陸地であった。
(2)　柳川市は市役所の西側まで有明海が迫っていた。
(3)　佐賀市の南は陸だったが、佐賀市の東側まで有明海が入り込んでいた。
(4)　『倭人伝』とは無関係であるが、佐賀市牛津は牛の角のように有明海が入り込んでいた。

奴國への記事には「陸行」「東行」という「行」という動詞がないと指摘したのは古田武彦氏である。そこで、古田氏は「奴國は本線上の國ではなく、傍國である」と結論した。この結論は誤りである。卑弥呼の國へは奴國を通過しなければ行き着くことはできない。ただ、古田氏の指摘は新たな発見をもたらした。「行く」という動詞を使わない「東南至奴國百里」の道は、水の道だったのである。

（奴國から）東行す。不彌國に至る。百里。官は多模と云う。副は卑奴母離と云う。千餘家有り。
奴國（大川市）から東へ百里（10km）進むと不弥國（筑後市）に到着する。官は多模と云う。副官は卑奴母離と云う。千戸余りの家がある。

「東行」は奴國の「東」である。この「東」だけは読み替えられることはない。方角の「南」を「東」に読み替えることが、いかに自己都合に従っているか明らかである。
『倭人伝』の方角はまちがいなく記録されている。この方角を自分の解釈によって都合良く変更してはならない。
①末盧國の東南、五百里陸路を歩むと伊都國に到着する。
②伊都國の東南、百里で奴國に到着する。
③奴國の東、百里行くと不弥國に到着する。
不弥國は奴國の東10kmである。そこは筑後市である。大川市役所から筑後市役所までの距離は12kmである。この道は本当に不思議なほど東にまっすぐである。

（不弥國の）南、投馬國に至る。水行二十日。官は彌彌と云う。副は彌彌那利可と云う。五萬餘戸。
南、投馬國（那覇市）に至る。水行二十日である。官は弥弥と云う。副官は弥弥那利と云う。五万戸余りの民家がある。

投馬國は不弥國（筑後市）の南である。だが、通常、この南は東と改訂して読まれている。東と改訂して瀬戸内海を進んだと想定するのである。だが、『倭人伝』の方角は南である。「南」に「水行」というのだから、海は東シナ海である。ここに「水行」と明示されている理由は、この航海には陸路がなかったからである。不弥國とは筑後市である。筑後市は、現在、内陸部である。ここに水行ルートが存在したのか。3世紀の筑後市を訪ねてみよう。筑後市の南は海である。筑後市から「南」に「20日間」の航海を経て到着した国が投馬國である。投馬国は沖縄那覇である。

福岡県みやま市（瀬高町・山川町・高田町）の遺跡

弥生時代（紀元前300年頃～紀元250年頃まで）

当時の地形は有明海の水位が下がり、海岸線は弥生期になるとさらに西に移動していき、小川、大江、金栗、さらに三橋、大和、柳川と島ができ、平地が広がり、弥生期後期には矢部川も一定の流れに変化している。渡来人により水田、水路、道路ができる。　（geo.d51419.com）

南、邪馬壹國に至る。女王の都とする所である。水行十日陸行一月
(不弥國の)南、「山結(倭国連合)」に至る。女王が都とする所は帯方郡から水行十日陸行一月である。

伊支馬と云う官が有る。次は彌馬升と云う。次彌馬獲支と云う。次は奴佳鞮と云う。七萬餘戸有り。
官は伊支馬。次は弥馬将と云う。次は弥馬獲支と云う。次は奴佳鞮と云う。七万戸余りある。

女王國より以北についてはその戸数、道里を略載し得た。
女王國より以北の国々についてはその戸数、道里を略載しえた。

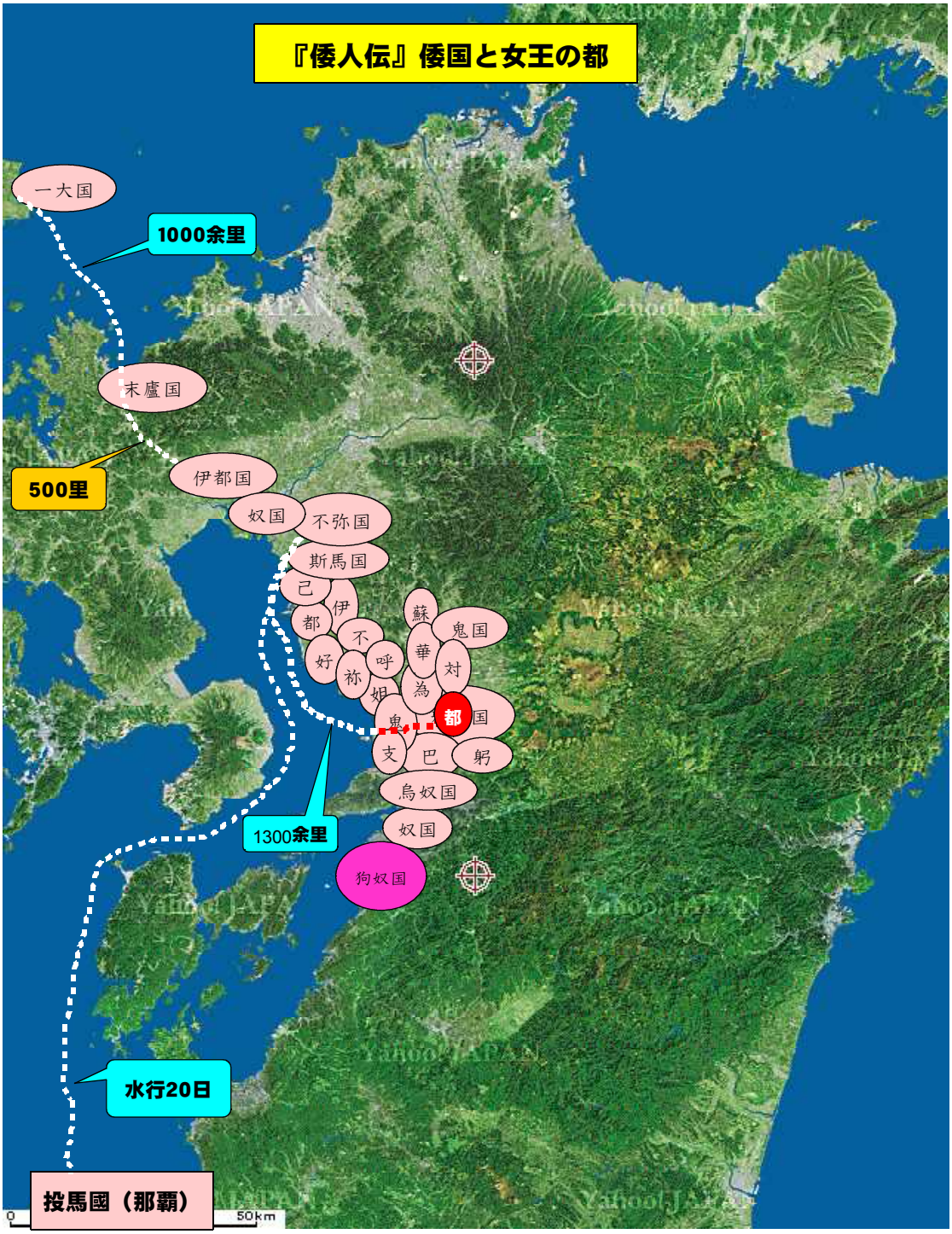
その餘の旁國(ぼうこく)は遠絶。詳細を得るべからず
その他の旁國は遠絶で、詳しいことは得ることできない。

次に斯馬國有り。次に已百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國あり。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に爲吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に窮臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。
此れ女王の境界の盡(つく)る所である。
(筑後市の)次に斯馬國(みやま市)有り。次に已百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國あり。次に彌奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國(菊池市)有り。次に爲吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國(熊本市)有り。次に窮臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國(宇土市)有り。次に奴國(宇城市)有り。
此れ女王の境界の盡(つく)る所である。

その南に狗奴國有り。男子を王と為す。その官狗古智卑狗有り。女王に屬さず。
女王國(熊本市)の南には狗奴國(八代市)が存在する。この國の王は男である。官は狗古智卑狗である。女王に属さず。

> 女王連合の「奴国」の隣にあって、連合に属さない国がこの国である。代々、男王であると伝えているが、これが本来の形であろう。女王国が特別だったのである。女王連合と拮抗できるだけの国力を備え、独立していた「狗奴国」とは「薩摩」と考えてきたが、鹿児島市と熊本市は地政的に異なる。
> 海は有明海と東シナ海と異なり、交渉国も異なる。「薩摩」は『倭人伝』表記を使えば「早投馬」となろう。
> 「早投馬」と「投馬国」は同じ意味をもつ。「薩摩」にとっては南の種子島、奄美諸島が友好国である。
> 「薩摩」と女王連合と無関係であろう。
> では、「狗奴国」とはどこか。熊本市と隣接し、地政学的に同じ国とすれば、「八代市」となろう。

(帯方)郡より女王國に至る萬二千餘里
帯方郡から女王國に到る総距離は1萬2000余里である。


『倭人伝』倭国と女王の都
一大国
1000余里
末盧国
500里
伊都国
奴国
不弥国
斯馬国
己
伊
都
不
好
祢
呼
姐
鬼
支
巴
蘇
鬼国
華
対
為
都
国
躬
烏奴国
奴国
狗奴国
1300余里
水行20日
投馬國（那覇）
0
50km
連合国
斯馬國
己百支國
伊邪國
都支國
祢奴國
好古都國
不呼國
姐奴國
対蘇國
蘇奴國
呼邑國
華奴蘇奴國
鬼國
為吾國
鬼奴國
邪馬國
躬臣國
巴利國
支惟國
烏奴國
奴國